

## 子どもたちに

## 夢と想像力を

|| わらべ館紙芝居  
ボランティア ||

昔話を今の子どもたちにつなげたい

中心市街地に、ひとときわ目を引く外観で、昔懐かしい歌や子どもたちの笑い声が聞こえてくる施設がある。ここ「わらべ館」では、子どもの歌とおもちゃをテーマにさまざま

まなイベントが催されている。そのなかでも、「ふれあいボランティア」のメンバー

による「紙芝居」が好評だ。

「わらべ館」は二年前、その運営を県民に参加してもら

うため、ボランティアを募集

した。現在、施設の案内や展示品の説明などを行う「ふれ

あいボランティア」として三

十四人が活躍している。この

ボランティアを通して、もつ

と子どもたちと触れ合いた

い、子どもたちに夢を与えたいとの思いが膨らみ、昨年六

月、上山文代さんと小谷正枝

さんが紙芝居を始めた。

「幼いころ、おじいちゃん

やおばあちゃんから聞いた昔

話が楽しい思い出として今も

心に残っています。この楽しい

昔話を子どもたちにつなげて

いきたい」活動の動機を語



息の合った演出をする上山さん(右)と、小谷さん(左)

る上山さんの目が輝く。小谷さんも「わたしも子どもが大好きで、お話も大好き。自分たちが楽しませてもらっているから続けられるんです」二人の顔から笑みがこぼれた。

二人は、紙芝居をもっと楽しんでもらうために工夫をしていることがある。それは、わらべ館が所蔵している百十九の紙芝居のほかに、図書館

などから子どもたちが喜んでくれそうな紙芝居を自分たちで探し出していること。そして、見に来てくれた子どもたち

の年齢層や季節に合わせて、その日その場で紙芝居の演題を決めていること。実際

に見ると、手遊びを交えて童謡を歌ったり、ハンカチを使って動物を作ったり、趣向を凝らして見て見る者を飽きさせない。

原動力は子どもたちの笑顔

そんな二人の原動力となる

のは、子どもたちの真剣なま

なざしと笑顔。子どもたちは、

毎月第一・第四日曜日の午後

二時に会場にやって来る。そ

の数ざつと三十人。なかにはお母さんに抱かれています小さな子どもも。「本当に目を輝かせて聞いてくれます。物語に入り込んでいるんですね。帰る時には『また来るで』と言ってくれます。うれしくて

どんどんやる気が出てきます」と上山さん。「今の子どもたちはテレビっ子が多いでしょ。」おはなしを聞いた

り、絵本に触れる機会をたくさん持つて欲しいですね。紙芝居を通じて、夢や想像力を

養い心豊かに育ってくれればと思います」と二人は熱い思いを語る。

わらべ館はこうした地道なボランティアに支えられ、入館者が減っている観光施設が

多い中、平成十三年度から入館者が右肩上がりに増えている。「ボランティアのみならず

が、また来たくなる楽しさを入館者と共に、作り上げて

くださるおかげです」とわらべ館の大石館長は言う。

今日も二人の息の合った楽しい「紙芝居」が、子どもたちを夢中にさせ、大きな夢を

与えている。